

イギリス連合王国 (United Kingdom)

イングランド、スコットランド、ウェールズ、および、独立までのアイルランドは、イギリス国王(女王)の統治下にあり、スコットランドは1707年まで王国であったが、以後は「グレート・ブリテン連合王国」(以下イギリス)となった。人口は5841.8万人(02)。イギリスの図書館の歴史は古く、かつ世界の図書館史をリードしてきた。16世紀にクロムウェルが修道院の破壊令を実行し、それまで各地に出来ていたコレクションは姿を消したが、その後、ゆっくりとであるが、さまざまな試みが見られた。16世紀の末にはすでに牧師館や学校組織にコレクションがあり、1598年にはトーマス・ボドリーがオックスフォードの大学図書館の再建に乗り出し、司書トーマス・ジェームズは連日開館の実績を残していた。17世紀の前半にはノーウィッチやブリストルに市の図書館が出現していた。スコットランドのジョン・デュリーは大規模な貸本のコレクションを構えていた。17世紀の後半に出現したのは、イングランドのトーマス・プレイおよびスコットランドのジェームズ・カークウッドによる「教区図書館」であった。これは数を増加させた点で図書館史に新たな頁を加え、キリスト教知識普及協会の設立も実現させた。17世紀のイギリス社会の商業的活気は、識字階級の増大を産み、コーヒーショップや新聞縦覧所といった施設が本の貸手となっていた。こうして出来たのが「巡回図書館」という名の貸本図書館であり、金を払って図書を借りる方法は18世紀に入るまでには定着していた。次いで現れた型は「会員制図書館」であり、「図書クラブ」の図書館であった。マンチェスターやリーズやバーミンガムの会員制図書館はその後も長らく存続しており、その最大の例が1841年開設のロンドン図書館であった。17世紀の後

半には団体の図書館が出来ており、その最初は1633年の薬剤師協会図書館、最大の組織が1660年設立の王立協会の図書館であった。こうして、ヴィクトリア女王の世紀を迎えたイギリスでは、すでに市民の図書館が開設される下敷きは出来あがっていた。1851年にハイド・パークで開催された万国博覧会はこの国の威信を世界に示したものであるが、すでにそれ以前、大英博物館(1759年開館)、ヴィクトリア・アルバート博物館(1837年開設)といった国家的資料館が設置されていた。1950年の「公共図書館法」の制定は偶然の所産ではないといえる。それにしても、無料の場を庶民の利用のために作ることに意識的に抵抗があった。最初の公共図書館は1851年にウインチェスターで開館したが、その後の動きは早いとはいえず、この世紀の末でようやく500館であった。しかし、1877年に設置されたイギリス図書館協会を背景に、ジェームズ・ダフ・ブラウンやスタンリー・ジヤスト、アーネスト・サヴィジといった先駆的図書館員の努力で公共図書館活動は市民の知るところとなり、さらに、バスマ・エドワーズやアンドリュー・カーネギーによる寄付が図書館の数の拡大に寄与していた。20世紀に入ると、二つの世界大戦にまきこまれ、図書館活動は頓挫、特に第二次大戦ではロンドンその他の都市がドイツ空軍の爆撃で破壊された。1942年にライオネル・マッコルヴィンが発表した報告書は、国内の図書館システムの整備を勧告しており、図書館協力のネットワーク化が実現するきっかけを作っていた。1972年に成立したブリティッシュ・ライブラリーは、国立図書館の合併統合であり、ここでイギリス全土の国内システムが実現していった。

エディンバラ大学図書館 (Edinburgh University Library)

エディンバラ大学は、当地の法律家クレメント・リチルの遺産により1580年に設立された大学で、ローマ教皇により設立された大学とは異なり、スコットランドに自由な教育施設を作ろうとする最初の試みであった。リチルの蔵書は図書館の基礎となった。その後の図書館は大学の卒業生の熱意と支えて拡大されていった。蔵書と資金の寄贈は相次ぎ、さらに18世紀の初頭から1837年まではイギリス図書の納本図書館となっていた。代わりにここはアイルランド学芸復興の拠点となっていた。図書館はエディンバラを訪れる観光客への目玉であり、そこには16世紀の法学者・大学長ジョージ・ブカナンの頭蓋骨が飾られていた。学部とその蔵書が増えるとともに、大学内の施設は分散化の一途で、中央館は1967年に完成したものの、すでに23か所に分散した全学の図書館のため、人件費は年度予算500万ポンドの55%を占めている。そのため、情報流通の機械化は急務であり、1984年よりオンライン機械化システムが稼働している。蔵書は現在260万冊、インクナブラが377冊、地図が11万枚、マイクロ資料が16.7万点で、エディンバラ大学の学位論文2.9万冊も所蔵している。特にスコットランドおよびエディンバラの歴史、家系図は豊富である。大学の学生数は1.7万名で、大学は特に言語研究で知られている。

ボドリー図書館 (Bodleian Library)

オックスフォードのボドリー図書館は、1488年に大学が開設したが、プロテスタント教徒の敵視のために図書館そのものが無視された。オックスフォードの卒業生で引退した政治家のトーマス・ボドリーが、妻の遺産を使って、1602年にこの図書館の再建にのりだした際には、蔵書はほとんど無かった。1610年に彼はロンドンの王室用度局(出版会)から納本を受ける権利を獲得し、図書館司書のトーマス・ジェームズを採用して、整備に当たらせた。ボドリーがジェームズに宛てた書簡集が編纂されているが、そこで図書館がいか

に作られたかを知ることができる。図書館はそれから400年、大学と卒業生に支えられ、さらに、ヘンリー・コックス(1813-1860)、エドワード・ニコルソン(1882-1912)といった館長の努力で、順調に蔵書を伸ばした。1842年の著作権法の施行までは義務納本が完全に納入されていたわけではなかったが、長い期間にわたる収集と、戦火による被害がなかったため、図書館の蔵書は世界的な規模となっている。コレクションはシェークスピアから現代作家にいたり、デイズレーリ以後のイギリスの政治家の文書は群を抜いている。オービー夫妻が遺贈した児童の遊び道具コレクションも比類がない。蔵書は現在、図書が700万冊、インクナブラが7000冊、地図120万枚、楽譜50万枚、マイクロ資料が83万点となっている。

大英博物館図書館 (British Museum Library)

イギリスでは政治・宗教的な理由から、18世紀の後半まで国の図書館の実現は遅れていた。この事態を憂慮した政治家たちは下院議長オンズロウを動かし、コレクションの獲得を働きかけた。核となったのは、王室の侍医で植物学者のハンス・スローンのコレクションであり、当時のロンドンの名物であった。標本を中心とし、民俗資料や図書資料も含まれていた。議会は「富籤」を発行し、その購入を実現させた。コレクションにはさらに、王室図書館およびコットン家・ハーレイ家の文書集積が加えられた。場所もブルームスベリー地区のモンタギュー・ハウスを獲得でき、改装なったこの場所で大英博物館は1759年に一般公開ができた。「ノーブル・キャビネット」と自称していた博物館の内容は、雑多であり当時の人からは「大骨董店」と呼ばれていた。18世紀の40年間は、館長も聖職者も兼任であり、蔵書は寄贈にのみ頼っていた。ここが変化したのは、19世紀のヴィクトリア女王の時代からであり、海外でのイギリスの威勢を受け、美術品と図書資料が爆発的に増加した。「大英帝国」の世界進出を背景にギリシアの彫刻

群や古代オリエント、古代ローマの発掘品が続々ともたらされた。1832年に刊本部長のアントニオ・パニッツィが館長となると、図書コレクションの拡大が進行した。パニッツィは、納本による国内資料の収集を完全実施にこぎつけ、外国書も徹底的に集めた。彼の時代に蔵書は倍増していた。パニッツィは蔵書を増やしただけではなく、その格納についても配慮していた。何次かにわたる改築の末にのこされていた中庭に大円形閲覧室を作り、壁面の棚には参考図をめぐらせたが、さらに、閲覧室の外側には鉄骨の書庫を配備し、蔵書を配架した。こうした手当てはあったものの、博物館の図書館部門の拡大は続き、19世紀の後半からは博物館は解体の方向をたどらざるをえなかった。まず、標本類が分かれて、科学博物館に編入され、続いて「新聞図書館」が郊外に建てられて、コレクションが二分された。さらに、1860年代には東洋語資料が別の建物に移された、こうして、20世紀には20か所に分割所蔵されるまでになっていた。19世紀末には図書館の総目録が刊行されはじめ、最大の書誌トゥールとして歓迎されていたが、博物館内部は有効な配置は講じられないままであった。政府は、1967年にデントン議長を中心とする「国立図書館委員会」を発足させ、大英博物館図書館その他の国立図書館の機能を再検討し、すべてを一つの機構に併せさせる勧告を打ち出した。これをうけて、1972年には「ブリティッシュ・ライブラリー法」が成立、大英博物館はこの新たな組織の一部に編入された。パニッツィが作った大円形閲覧室は、知識人の拠りどころであり、その廃止には反対意見が多かったものの、ブリティッシュ・ライブラリーの新館がセント・パンクラス地区に出来あがると、閲覧室そのものは文化財として形だけは残されたが、残骸に等しいものとなっている。

ブリティッシュ・ライブラリー (British Library)

1969年の国立図書館委員会(通称「デントン委員会」)の勧告を全面的に受け入れ、イギリス政府は1972年に「ブリティッシュ・ライブラリー法」を可決、1973年4月にこの国立図書館が発足した。イギリスにはそれまで正規の国立図書館はなく、大英博物館がその役割を担っていた。成立したブリティッシュ・ライブラリー(日本では「大英図書館」とか「英国図書館」とも呼ばれる)には3館の国の図書館その他が編入されていた。その最大なものは「大英博物館」の図書館部門で、1753年にロンドンに設立、200年にわたる歴史のなかで場所不足のためコレクションを分散させていた。第二の図書館は、1916年より国内公共図書館への貸出図書館としてロンドンで存在を続けたが、第二次大戦で相当な被害を受けていた「国立中央図書館」であった。第三の図書館は、1962年に科学技術文献の貸出・複写コレクションとしてヨークシャー州ボストン・スバで設立されていた「国立科学技術貸出図書館」で、その活動は図書館の新時代を画するものとして成功していた。さらに、新しい組織には1947年に大英博物館のフランシス館長の提唱で出来た「イギリス全国書誌」が加えられた。デントン委員会で調査された科学博物館図書館はブリティッシュ・ライブラリーには含まれなかった。ブリティッシュ・ライブラリーは、研究のための資料を文化財として保存する参考局(「大英博物館図書館」を吸収)、全国の複写要求に応ずる貸出局(「国立科学技術貸出図書館」および「国立中央図書館」を吸収)、書誌サービス局(「イギリス全国書誌」が移管)から成り立っていた。ここにはさらに、教育科学省の科学情報局が1974年に研究開発部としてブリティッシュ・ライブラリーの組織に加わり、国内の図書館情報学の研究に資金を提供している。組織はさらに拡大され、1974年にイギリス図書館協会図書館、1982年にはインド局の図書館、1983年には音声記録研究所が国立音声資料館としてブリティッシュ・ライブラリーに加えられた。経済情勢の厳しさを受けて新館の建築は長引いたが、1997年には本館が大英博物館の北方一キロのセント・パンクラス駅の隣接地に開館。図書館にはこのほかにロンドン郊外コリンデルの分館「新聞図書館」およびヨークシャーの貸出局が活動している。14人からなる理事会は図書館の館長と局長のほか、政府任命の委

員により構成され、管理運営に当たっている。1990年代には二つの「戦略計画」が発表され、将来の活動方針が打ち出された。2000年度の子算は1億1300万ポンドで、職員数は2339名。閲覧席は本館に1480席がある。大英博物館から引き取った蔵書は、現在では約1600万冊、写本・原稿が30万点、楽譜が150万点、特許資料が440万点、切手が810万枚、学位論文が61万冊、マイクロ資料が430万点となっている。

ロンドン図書館 (London Library)

大英博物館刊本部の利用が不便なことを指摘した文人トーマス・カーライルの発言に刺激され、多くの文士や作家たちが集まって、自分たちで自由に利用できる場所を持つと決議し、1841年にロンドンの中心街に場所を借りて設立した図書館。1848年までに会員数は882名、蔵書は1.3万冊と順調なすべりだしであった。利用しやすいように最初から開架制で、館外へは郵送貸し出しもおこなった。蔵書は文学・美術・歴史などの人文畑のものが多く、ロシア語図書も当時としては豊富であった。1845年にセント・ジェームズ・スクエアの建物を借り受け、後にここを買い取って、現在にいたっている。独立採算の施設で、設立当初の会費は2ポンドであったが、現在は年間150ポンドで10冊まで借りられる。会員にはジャーナリスト、出版関係者、学者が多く、歴代館長にはカーライルのほかに、詩人のテニソン、編集者のレスリー・ステューヴン、詩人のT・S・エリオットなどがいた。24名からなる委員会は購入図書の選定のほか、50名いる館員の年金問題まで討議している。2001年現在の蔵書は約100万冊で、年間増加は7000冊。創設150周年を迎えて、蔵書目録の機械化がはじまっているが、なおもヴィクトリア朝の雰囲気と館員の参考活動に対する評価が高い。

フランス (France)

フランスの図書館が姿を表したのは紀元9世紀、シャルルマーニュ(カルル大帝)がアーヘンの宮廷に学者を集めて、カロリガ朝ルネサンスを推進した時であった。領土内には修道院が作られ、ベネディクト派は修道士たちに厳格な写本の規律を課した。13世紀にはフランスの都市に寄宿舎とその学問所が出来ており、ロベール・ド・ソルボンは1257年には大学をパリに設立した。ここには鎖につながれた本のコレクションがあり、学生の利用に供した。14世紀に国王シャルル五世が宮廷に構えた図書館は、後に火災で消失したものの、王室図書館の萌芽といえる。その後の宗教戦争のため、特に北部の町は破壊された。フランスでは宗教改革後の16世紀にも、イエズス会が各地で図書館作りに熱を入れており、イエズス会が追放され後は、かえってそのコレクションが各地の図書館を豊かにしていた。王室の図書館はこの間にも拡大されていたが、17世紀に知られたコレクターは貴族であった。宰相となったリシュリュー枢機卿は自宅に見事な図書館を構えており、その後継者のマザラン枢機卿も本集めに熱中し、司書カプリエル・ノーデを雇って管理に当たらせた。このため、マザラン図書館は学者が利用し、毎日100人以上が来館していたといわれる。蔵書には4万冊の図書と3000冊の写本があった。王室では本だけでなく、文化財としてのコインやメダル、版画なども収集しており、これがフランスの図書館の方針ともなっていた。フランス革命により、貴族が逃亡し、その財産は最初は略奪にまかれさせていたが、1793年には法令により文献保管所が市内外各地に建てられ、個人や修道院のコレクションが集め

られた。その結果潤ったのは王室図書館から名称を変えていた国立図書館であった。国内の図書館の写本やインクナブラの総目録の編纂も可能となっていた。すでに法廷納本がフランスで最初に実現していたが、その後の法改正では、すべての出版物を一部ずつ国立図書館に納入する義務が定められ、さらに、歴史関係はマザラン図書館、文学関係はアルスナル図書館、科学関係はサント・ジュヌヴィエーヴ図書館への納入が定められた。19世紀の間に図書館の中央集権が進むと、教育省を中心とした国の図書館網のシステム化が実現する。第二次大戦では、北部の町シャルトルやプレストがドイツ軍により破壊されたが、教育省はその再建にも力を入れ、戦後1年で42の市民の図書館が実現されていた。1989年には1578の都市に図書館が実現し、蔵書は総計1400万冊となっていた。1977年には「ボンビドー・センター」の開館で国立図書館は1.4万人の利用者を収容できる施設となった。そのうえで、1988年にミッテラン大統領は最大規模の「フランス図書館」の構想を発表し、中央の理想的な情報管理体制の実現に着手している。人口は5928万人(02)。

フランス国立図書館 (Bibliothèque Nationale de France)

フランス最大の図書館である国立図書館の起源は、ヴァロア王朝のルイ十一世の15世紀までさかのぼる。シャルル八世は1461年に父の残した蔵書をもとに王室図書館を開設。蔵書は美術的な価値のある本が主であった。フランソワ一世は、ギョーム・ビュデを図書館長に任命、その任期中の1537年に法令を発し、フランス国内で刊行されるすべての本の義務納入を定めた。完全履行にはならなかったが、ここに近代の納本制度の出発点があった。1661年、ルイ十四世はニコラ・コルベールを図書館長に任命し、コルベールは学者たちに図書館を公開した。図書館が貨幣コレクションを重視したのは、ルイ十四世の好みからであった。1719年に館長となったジャン・ポール・ビニオンは、精力的に収書に努めて、任期初年の7万冊の蔵書を倍増させていた。フランス革命は、図書館の職員にとっては厳しい時期だったが、蔵書にとっては恩恵の時であった。職員は革命議会で忠誠を誓わされ、多くが解雇された。封鎖された貴族や修道院のコレクションは、名称を変えた「国立図書館」に集められ、特に写本は図書館の最大の収穫となっていた。1814年には「王立図書館」とな

り、納本制のため、更に蔵書を伸ばした図書館は、レオポルト・ドリル館長のもと、1897年より『印刷図書館総目録(Catalogue General des Livres Imprimés)』の刊行を始めた(全131冊、250万点を収録する目録は1981年に完結している)。1858年には図書館の閲覧室を研究者用と市民用とに分ける試みがあった。蔵書のほうは更なる増加を続け、1930年には蔵書が300万冊を越える。場所の手当てが遅れ、図書館は分散化の方向を辿ることとなった。貨幣部門はすでに1917年に別置され、1920年には音楽部門が、1937年には版画部門が切り離され、1946年には地図部門も別館を手当てされて分離した。1923年に、他の歴史的に重要な図書館である、マザラン図書館、アルスナル図書館、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館の三館が組織的には国立図書館の管轄下となる。1974年にはイギリスのブリティッシュ・ライブラリーにならって「国立中央貸出図書館」が発足、国内での雑誌の複写要求に対応した。しかし、蔵書の拡大は、図書館の機能に係わるまでとなり、数を増やす利用者を収容する設備すらなかった。こうした実態を改善させるため、1988年にミッテラン大統領は新しい構想を提案する。新しい図書館「フランス図書館」を建設し、ここに研究機能と貸出機能を集中させ、古い図書館の建物は写本や古書資料や貴重書の保存館とすることにし、ここには資料の保存と脱酸化の設備も置かれることとなった。現在の新しい「フランス国立図書館」は「フランス図書館」とかつての「国立図書館」を総称している。図書館の蔵書は約1400万冊、写本・原稿が22.5万点、インクナブラは1.2万冊、地図が22.5万枚、楽譜を210万点、マイクロ資料を100万点所蔵している。コレクションは古代ギリシア・ローマの研究から近代までをカバーし、資料の種類もあらゆる形態にわたっている。

サント・ジュヌヴィエーヴ図書館 (Bibliothèque Sainte Geneviève)

16世紀初頭に僧院として出発し、11世紀以降の写本を何冊か抱えていたが、政治混乱のため、図書館蔵書は散逸し、1619年には空になっていた。リシュリュー枢機卿は1624年にフランソワ・ド・ラ・ロシュフーコーを図書館復興の役につかせ、ロシュフーコーは自分の蔵書600冊を寄付して、ここにサント・ジュヌヴィエーヴ図書館が始まった。18世紀の間に蔵書を伸ばし、1790年には約6万冊で、マザラン図書館とならぶ存在になっていた。神学関係が44%だが、歴代の学者館長のおかげで世俗の本もすでに56%におよんでいた。フランス革命となり、多くの修道院図書館の蔵書は没収されたが、館長のパングレはここを国家図書館としてそのまま残すよう申請し、その存在を認められる。19世紀になると、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館は、マザラン図書館およびアルスナル図書館とともにその機能を問われることになった。学者館員が多く、人件費は膨大な金額にのぼっていたが、図書

購入費のほうは極めて少なかった。機構改革に努めるとともに、蔵書内容も哲学、法律、科学、医学方面を網羅し、市民の利用に応えられるようにした。1844年にはラブルーストのガラスばりの長方形閲覧室が完成、これは後のボストン公共図書館のモデルとなった。500の座席は市民の利用で常に満席、1910年の年間利用者は22.5万名で、これはマザラン図書館の利用者の10倍、アルスナル図書館の20倍であった。1894年には午後の閉館時間に女性の入館も受け付けた。町中でパンテオンに近いこの図書館の便利さのために、哲学者ベルグソンも詩人のボードレールも利用者であった。クララ・ツェツキンの顔も見え、一時はトロツキーもレーニンも席についていた。こうした状況のもと、1930年にはここはパリ大学の一部に編入され、30万人を越すパリ大学13キャンパスの学生は市民とともにここを自由に使っている。1991年には利用者数39.6万名で、貸出冊数は26.6万冊であった。こうして、サント・ジュヌヴィエーヴ図書館は時代にあわせて図書館の機能を変化させ、フランスの国立図書館の一翼を見事に果たすことができた。蔵書は現在約300万冊、写本4000冊およびインクナブラを1450冊を所蔵している。

マザラン図書館 (Bibliothèque Mazarine)

ルイ十四世時代の宰相であった枢機卿ジュール・マザランは、1643年に自分の図書館を創設し、図書館の著述を発表してすでに図書館管理者として知られていた医師のガブリエル・ノーデを司書に採用した。ノーデは、マザラン卿の権勢のもと、寄贈と購入で蔵書をいっきよに増やした。マザラン卿の威勢は大きく、寄贈は相次ぎ、軍が国外から持ちかえった資料も多く、一方ではイタリアで金にまかせて貴重書を買集めた。1651年のフロンド党の乱でマザランは一時亡命するが、宰相に返り咲いて帰国した時には、図書館蔵書は競売で売り払われ、司書ノーデはスウェーデンに去っていた。マザラン卿は死去にさいして多額の資金を図書館運営のために残し、これをコレージュに編入することを言い残していた。カトル・ナシオン・コレージュの図書館として、建物も1691年に完成したマザラン図書館は一般に公開された。1789年のフランス革命のさい、ほとんどの貴族や修道院の図書館は蔵書を没収されたが、マザラン図書館はコレクションに宗教色がなく、公開して市民に愛されていたため、無事であった。蔵書はすでに図書が5万冊、写本が4000冊になっていた。1839年の図書館改革の際、マザラン図書館は国立図書館の傘下に入り、その貴重な古写本を研究者の利用に供している。印刷された目録は、1884年から1901年の間に出された。

アルスナル図書館 (Bibliothèque de l' Arsenal)

書物収集家の軍事大臣ポールミイ侯爵が、王室武器庫長の自分の住まいに1757年に設立し、ヴィリエール侯爵の蔵書その他の多くのコレクションを併合した。1785年にはアルトワ伯爵がこれを買取り、フランス革命の際には18万冊あった蔵書は差し押さえられ、パリの図書保存館の一つとなり、1797年に「国家および国民の図書館」と定められた。1816年にはアルトワ伯爵に返還されたが、内務省の所轄となっていた。1824年に館長となったシャルル・ノディエは、1844年までの間にサン・シモン文庫および稀観書収集家ブラスペル・アンファンタンの写本を加えた。20世紀初頭には、納本図書館となり、蔵書は60万冊にまで増加した。1926年には国立図書館の傘下に入り、現在の蔵書は約100万冊、写本は1.5万点、10万枚ばかりの版画も所有する。中世から19世紀にいたる文学資料の一大宝庫であり、音楽関係資料も豊富。蔵書には13世紀の写本や見事な挿絵図書がある。研究者には公開されているが、一般の参観は認めていない。

ドイツ (Germany)

ドイツの図書館は歴史のうえで何度も試練の時を経てきた。16世紀の宗教改革とそれをめぐる宗教戦争はカトリックとプロテスタントの二派が互いを攻撃しあったため、中世期にすでに栄えていた修道院とそのコレクションは破壊された。この宗教対立により、互いの陣営はそれぞれの地盤を固めることにも精力を注いでいた。16世紀には各地で君公が庇護する図書館が出現し、地方分権の方向を助長していた。17世紀にはヴォルフエンビュッテルの図書館を始めとする見事なコレクションとその管理に当たったライプニッツその他の文人を輩出していた。図書館の理論的基礎は、こうした地方君主の図書館の発達に支えられていた。それは、大学図書館にも影響を与え、ゲッティンゲン大学図書館はドイツ国内の大学図書館の模範となっていた。領主図書館と大学図書館の発展は、ゼンケンベルク研究所のような自然科学の専門図書館も産んでいた。こうした「ドイツの時代」はフランス革命とともに消え去った。ナポレオン軍の進

駐の結果、各地の修道院コレクションは没収され、運び去られるか、市の図書館に変えられた。大学も閉鎖されたところ、蔵書を分割されたところがあり、新たな大学も出現していた。19世紀の間、プロイセン王国が急速に勢力を得、バイエルン大公のミュンヘンも蔵書を大きく伸ばしていた。この二つの図書館はドイツ図書館学の拠点となっていた。1871年にドイツ帝国が成立すると、ベルリンのプロイセン図書館は、政治的な力関係を背景にし、「目録規則」の制定を実現し、共同利用の中心となっていった。19世紀後半のベルリンは世界の中心であった。この時期には、出版人の主導で図書文化財を保存する、ドイッチェ・ビュッヘライといった新しい型の中央図書館も出来あがっていた。第一次世界大戦とその後の経済不況はドイツの図書館を直撃し、学術助成協会の活躍はあったものの、回復を見ないままにヒトラーの時代が到来、特に学術図書館はナチスの政策に合わないために図書費と定員を削減された。戦争末期には連合軍の空爆で多くの図書館が破壊された。カッセルとキール町の図書館はほぼ完全に姿を消した。第二次大戦の後、ドイツは東西の二国に分断され、図書館は互いに異なった路線を歩まねばならなかった。東ドイツの図書館は社会主義のための教育の場であり、中央の指令に従わざるを得ず、西ドイツの図書館はアメリカ的な市民への奉仕と地域分散化の方向がさらに進められた。西ドイツでは大学図書館がドイツ研究協会の支援で復興を果たし、機械化の面でも世界をリードするまでになっていた。しかし、分裂国家のこの状況は1990年まで50年間近く続いた。東西がようやく統一してからは、まず両国の国立図書館が名目的に合体し、二つの場所で活動する最大規模のコレクションとなった。こうして波瀾の歴史をかいくぐってきた図書館は、残された遺産をもとに新たな時代に向けて出発している。人口は8272.1万人(02)。

ドイッチェ・ビュッヘライ (Deutsche Bücherei)

地方分権を柱とする歴史的な理由で、国の中央図書館を持たなかったドイツで、書籍販売協会はライプツィヒ市およびザクセン州の支援のもと、1912年にドイツ語出版物の後世への保存のため「ドイッチェ・ビュッヘライ」を創設した。ここではドイツ国内だけでなく、オーストリアやスイスのドイツ語出版物、さらには外国でのドイツ著作の翻訳までを収集。1920年代のインフレ期にはドイツ帝国からの支援もあったが、1933年にヒトラーが政権を握ると、必ずしも自由な収集ができなくなっており、さらに、1945年にライプツィヒがドイツ民主主義共和国(東ドイツ)の統治下に入ると、職員の思想教育が始まり、資料の貸出も自由ではなくなった。建物はソ連軍の砲撃で部分的に破壊された。1990年に東西ドイツが統一されると、図書館の職員はかつて党員であったかを問われた。統一後はフランクフルト・アム・マインの「ドイッチェ・ビブリオテーク」とともにドイツ国立図書館の役割を果たしているが、特にドイツ語刊行物の保存と書誌センターとして機能している。現在の蔵書は約920万冊、インクナブラが758冊、楽譜が26万点、レコードが18.3万点。特殊コレクションには出版史、亡命関係、アンネ・フランク文庫などがある。

ドイッチェ・ビブリオテーク (Deutsche Bibliothek)

第二次大戦後の1947年、西ドイツとなった連邦共和国でドイツ語文献の収集・保存館としてフランクフルト・アム・マイン市内の大学に隣接した場に設立された。ドイツ語図書の保存館である「ドイッチェ・ビュッヘライ」が東ドイツの領土内に入ったからである。1970年にはベルリンの「ドイツ音楽文書館」が併合された。この図書館では1945年以後の国内出版物を納本規定によって収集するとともに、東ドイツの出版物も交換により集めていた。さらに、ここでは戦時中に国外に亡命したドイツ人の著作を積極的に集めた。西ドイツの出版社は1961年には「ベルリンの壁」の実現に反対し、1968年には東ベルリンの軍隊がブラハの反革命の弾圧に加わった際に、東への納本を拒否した。蔵書は順調に増加、1970年代には書誌データの機械処理に世界に先がけて成功していた。中央館のほかに分館が河をへだてたザクセンハウゼンに建設された。現在の蔵書は約630万冊、手稿を15.3万点、地図を13万枚、マイクロ資料を67.5万点所蔵しており、ベルリンの音楽資料は図書89万冊、楽譜33.6万冊、レコード65万枚を持っている。ドイツ統一後に「ドイッチェ・ビュッヘライ」とともに「ドイッチェ・ビブリオテーク」という統一組織となり、その本部はフランクフルトの分館に置かれている。

ヴォルフエンビュッテル・アウクスト公爵図書館 (Herzog August Bibliothek Wolfenbüttel)

ブランズウィック=ヴォルフエンビュッテル公アウクストは、ゲッチングンで学び、諸国を歴訪するとともに、遺族の資産を受け継いで、図書コレクション、特に写本の収集にのめりこみ、さらに結婚して資産を増やし、1572年に設立していた個人図書館を自ら運営していた。後継者のハインリヒ・ユリウスは図書館の写本コレクションを伸ばした。1716年に図書館長に任命された哲学者のゴトフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツは、1748年までの任期中に約6万冊を増やし、蔵書のアルファベット目録を編纂し、さらに、有名な円形図書館を完成させた。これはその後の図書館建築のモデルとなった。1770年には劇作家のゴットホルト・レッシングが館長となり、11年間在職したが、この時期は財政難のため蔵書は拡大しなかったものの、レッシングはその著作で図書館のコレクションの認知を広めていた。19世紀には活動は停滞し、円形閲覧室は1887年に破壊される。20世紀前半は目立った動きはなく、図書館は市の財団管理となっていた。1950年に館長となったエアハート・ケストナーは、この図書館を中世研究の参考図書館と位置づけ、州政府の支援をとりつけ、蔵書も補充した。1968年より館長を務めたパウル・ラーベは、ここを真の研究図書館とし、研究者に対する奨学金の提供とともに、滞在の場とし、国際的な研究図書館をつくりあげた。フォルクスヴァーゲン財団は、ドイツに国立中央図書館がないこともあり、地方の歴史的な図書館を支援していたため、ヴォルフエンビュッテル公爵図書館は今なお中世期より啓蒙時代にいたるヨーロッパ史の研究には欠かせない資料を所蔵する図書館として有名である。現在の蔵書は約87.5万冊の図書で、3000点の聖書、3500冊のインクナブラ、18万点のマイクロ資料を保存している。

ゲッチングン大学図書館

(Niedersächsische Staats- und Universitätsbibliothek Göttingen)

1734年にハノーファー公の蔵書約9000冊、および写本49冊、地図2000枚が寄贈されて大学図書館の基礎ができた。古代言語学者ヨハン・ゲスナーが初代館長となり、1737年に開館したときには蔵書は1.2万冊であった。神学、歴史、法学が主であったコレクションは、学内の教授たちおよび卒業生の支援でその範囲を広げてゆき、ロシア研究や英米文学にまで広げられていった。1828年にグリム兄弟はこの大学の図書館長、次いで、教授となっていたが、ハノーファー家が女性の後継者を退け、イギリスから世継ぎを入れたのを機に他の5人の教授とともに退職した。1886年に図書館長となったカール・チアツコは大学に図書館学の講座を作るとともに、図書館組織を近代化していた。第一次世界大戦の後、ドイツ救済協会はゲッチングンの自然科学コレクションの再建を支援した。1933年からの国家社会主義の時代、館長カール・ハルトマンはユダヤ人追放のナチスの政策に反抗したが、3人の館員が図書館から追われた。戦時中に図書館の建物は爆撃で破壊されたものの、地下室の蔵書は無事であった、代わりに炭鉱に移して保管していた蔵書のほうが坑道の爆発で失われた。第二次大戦後、ドイツ研究協会(救済協会の後進)はゲッチングン大学図書館を自然科学、英米文学、科学哲学その他幾多の分野のコレクションを強化して支えた。1949年、ハノーファーのニーダー・ザクセン州政府はこの大学図書館に州図書館の名称を付与し、名実ともにドイツ全体の学術界の共同利用の場とした。機械化が推進されるとともに、ここはドイツ・マイクロ・マスター登録コンソーシアムの中心館でもある。蔵書は現在405万冊、写本1.3万点、インクナブラ3100冊。

ロシア (Russia)

キエフ・ルーシとよばれた10世紀から13世紀の時代にどのようなコレクションがあったか定かではなく、ビザンチン帝国からキリスト教とスラブの書き言葉を受け入れ、協会関係の文献が集められていたはずだが、13世紀タタール族の侵入と蹂躪でほとんどの文化の痕跡は消えてしまった。その後のモスクワ公国の時期、イヴァン四世などの歴代皇帝は宮廷にコレクションを持っていたとされるが、これも正確には分らない。ロシアが西欧の文明を取り入れたのは、ピョートル大帝の18世紀からであった。ピョートルはまず科学アカデミーを設立して、学問の流入を図った。その後の歴代皇帝、特に何代か続いた女帝は図書文化を重視したが、なかでも、エリザベータ女王は1755年にモスクワ大学を創設、エ

カテリーナ二世はペテルブルグに帝室公共図書館を華々しく開館した。このコレクションはポーランド分割の際に運び出してきたものであったが、啓蒙主義の薫陶を受けていたエカテリーナはフランスのデイドロの蔵書を買取っていた。エルミタージュ博物館を建設したのも彼女であった。19世紀には貴族文化が開花し、都市には出版者が氾濫するようになった。歴代皇帝の宮廷ではフランス語が会話語であった。20世紀に入り、ニコライ二世の処刑でロマノフ家が断絶すると、レーニンは反革命の白軍との国内戦を勝ち抜き、社会主義社会の建設にのりだした。その基礎となるのが「文盲」の撲滅と読書の普及であった。図書館の数は農村地区で急速に伸びた。国内にいくもの「文化大学(図書館学校)」が建設され、図書館員の養成が追いつかないほどであった。ここでは、社会主義型の図書館学教育が実施され、中心は「推薦書誌」の作成法であった。こうして、数においては世界有数の図書館国となったが、1945年からの第二次世界大戦では、もともとユダヤ人が多かった西部のウクライナなどを蹂躪され、この地方の図書館は破壊された。ドイツ軍の敗北とともに、ベルリンに至ったロシア軍は、今度はドイツの文化財の略奪者となった。美術作品のみならず、貴重な図書もどのくらい持ち去られたか定かではない。1990年に社会主義体制が崩壊すると、ソ連邦は15の独立した共和国に分裂した。現在は新たな試練の時期を迎えている。人口は1億4516万人(02)。

ロシア科学アカデミー図書館 (Biblioteka Rossiiskoi Akademii Nauk)

ロシア最古の図書館で、ピョートル一世により1714年にペテルブルグ夏庭園のコテージに開設された。その後、学者ロモノソフなどにより蔵書が拡大され、1728年にはワシリエフスキー島の大学内に移転。1740年よりすべてのロシア国内資料の納本館に指定され、1930年には全ソ連邦の中央学術図書館に定められた。第二次大戦中のレニングラード包囲戦では、小さな閲覧室だけが灯火もなく開館されていた。1988年2月の火災は、図書館史における最大の悲劇で、約30万冊の書籍が消失し、350万冊の新聞・雑誌その他の文献が水浸しとなってしまい、その修復には何年もかかり、国際的な救援隊が組織された。蔵書は現在約1200万冊で、ロシア語と外国語の部門に分かれ、外国語資料は国内最大の規模であり、日本語図書も揃っている。図書の他に

は写本が816冊、原稿が2万点、地図が12万枚ある。17の閲覧室には年間約190万人の利用者が訪れる。この図書館は国内約2000の図書館、3000の学術機関との相互貸借の中心館となっている。刊行した蔵書目録や総合目録の点数も極めて多い。

ロシア国立図書館 (Rossiiskaia Natsional'naia Biblioteka)

1795年にロシア皇帝エカテリーナ二世は、首都ペテルブルグのネフスキー大通りに帝国公衆図書館を設立した。コレクションの中核となったのはポーランド分割によりワルシャワの図書館から獲得したスラヴ諸語の図書資料であった。アレクサンドル一世は1810年にここを納本図書館とする指令を発した。19世紀の間、この古典的な建物はペテルブルグ在住の作家や芸術家たちに愛され利用されたが、革命家たちの思想の温床でもあった。歴代館長には貴族のストローガノフや言語学者のニコライ・マールなどがいた。1925年に都市名がレニングラードとなると、図書館は19世紀の作家サルティコフ＝シチェドリンの名称を冠するようになったが、当人と図書館とは関係がない。図書館は第二次大戦期のドイツ軍による900日間の包囲のなか、閉館はしなかったが、貴重書はウリヤノフスク地区に疎開していた。1991年にソ連邦が崩壊すると、図書館は元の名称に戻り、ロシア共和国第二の国の図書館となった。蔵書は2000年現在で約200万冊で、18・19世紀の思想・文学を網羅し、非合法出版物や内戦時期のポスターなども集めている。ペテルブルグの歴史資料はここが最も豊富である。図書のほかに44万点の写本や原稿類、13万枚の地図、3.5万点の音楽レコードも所蔵している。稀観書のなかには11世紀の『オストロミール福音書』がある。国内図書館への参考調査館でもあり、オンラインによる目録データの提供も進んでいる。この図書館は19世紀から各種の貴重な目録を刊行しており、ここで育った書誌学者は多い。図書館学コレクションも集めており、「図書研究所」も付設され、1935年より1953年には大学院図書館学研究プログラムが開催されていた。28の閲覧室には1390座席がある。1998年には新館が開設された。

ロシア国家図書館 (Rossiiskaia Gosudarstvennaia Biblioteka)

ロシア共和国最大の図書館。モスクワの中心でクレムリンに隣接した場所にあり、ソ連邦時代を通じ1992年までは「レーニン図書館」と呼ばれていた。設立は1862年であり、貴族ニコライ・ルミャンツェフがペテルブルグの自宅に開設した蔵書2.8万冊の「ルミャンツェフ博物館」が基礎となり、1881年に約10万冊になっていた蔵書はモスクワに移された。19世紀にかけて、書誌学者ニコライ・ルバーキンの蔵書などを獲得するなど、次第に規模が大きくなってゆき、1917年の革命時には年間約9万人の利用者がいた。利用者のなかには多くの作家や芸術家がいた。しかし、ここが最大規模の図書館となったのは、モスクワに首都が移ったスターリン時代であり、全ソ連の出版物の納本館となってからであった。現在の蔵書は図書が約1590万冊、中世写本が6万冊、インクナブラが5560冊、地図が15万枚、楽譜が36.2万枚、レコード3万枚で、学位論文は約76万冊。写本部には作家ゴーゴリやトゥルゲーネフ、チェホフなどの原稿があり、古代スラヴ語の写本や11世紀の福音書なども所蔵している。図書館は書誌学および図書館学の研究でも知られ、『図書館学研究』(1952-)、『海外における図書館学・書誌学』(1958-1998)などを刊行してきた。建物は1960年に19階の書庫を完成させ、1975年には新聞と学位論文が郊外ヒムキに出来た新館に移転していった。